vRealize Automation の管理

2020 年 12 月 21 日

vRealize Automation 8.0

vmware®

最新の技術ドキュメントは、 VMware の Web サイト （https://docs.vmware.com/jp/）

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴイエムウェア株式会社
105-0013　東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

Copyright © 2021 VMware, Inc. All rights reserved. 著作権および商標情報。

目次

vRealize Automation の管理

1

ほとんどの vRealize Automation 管理タスクは VMware vRealize Suite Lifecycle Manager から実行しますが、このガイドでは、vRealize Automation から実行できるいくつかの重要なユーザーおよびシステム管理タスクについて説明します。

vRealize Suite Lifecycle Manager の操作の詳細については、vRealize Suite Lifecycle Manager のインストール、アップグレード、および管理を参照してください。

vRealize Automation の一部の管理タスクは vRealize Automation 内で完結しますが、他のタスクは vRealize Suite Lifecycle Manager や Workspace ONE Access などの関連製品を使用する必要があります。ユーザーは、該当するタスクを完了する前に、これらの製品とその機能について理解しておく必要があります。

たとえば、バックアップ、リストア、およびディザスタ リカバリの詳細については、vRealize Suite 製品ドキュメントの「[Backup and Restore, and Disaster Recovery > 2019]」セクションを参照してください。

注： ディザスタ リカバリは vRealize Automation 8.0.0 ではサポートされていません。ディザスタ リカバリのシナリオで vRealize Automation を使用するには、vRealize Automation 8.0.1 以降にアップグレードします。

vRealize Automation でのユーザーとグループの管理

2

vRealize Automation では、VMware が提供する ID 管理アプリケーションである VMware Workspace ONE Access を使用して、ユーザーとグループをインポートおよび管理します。ユーザーとグループをインポートまたは作成すると、[ID およびアクセス権の管理] 画面を使用してロールの割り当てを管理できます。

vRealize Automation のインストールには、VMware Lifecycle Manager（vRSLCM または LCM）を使用します。vRealize Automation をインストールするときは、ID 管理をサポートするために、既存の Workspace ONE Access インスタンスをインポートするか、新しい Workspace ONE Access インスタンスを展開する必要があります。この 2 つのシナリオにより、管理オプションが定義されます。

- 新しい Workspace ONE Access インスタンスを展開する場合は、LCM を介してユーザーとグループを管理できます。インストール時に、Workspace ONE Access を使用して Active Directory 接続を設定できます。または、以下で説明する [ID およびアクセス権の管理] ページを使用して、vRealize Automation 内でユーザーおよびグループのいくつかの側面を表示および編集できます。
- 既存の Workspace ONE Access インスタンスを使用する場合は、インストール時に LCM を介して、vRealize Automation で使用するインスタンスをインポートします。この場合、ユーザーとグループの管理用に引き続き Workspace ONE Access を使用することも、LCM の管理機能を使用することもできます。

vRealize Automation ユーザーにはロールを割り当てる必要があります。ロールは、アプリケーション内の機能へのアクセスを定義します。Workspace ONE Access インスタンスを使用して vRealize Automation をインストールする場合は、デフォルトの組織が作成され、インストーラには「組織の所有者」ロールが割り当てられます。他のすべての vRealize Automation ロールは、組織の所有者によって割り当てられます。

vRealize Automation には、組織ロール、サービス ロール、プロジェクト ロールという 3 つのタイプのロールがあります。vRealize Automation Cloud Assembly、Service Broker、および Code Stream では、通常、ユーザー レベルのロールでリソースを使用できますが、リソースを作成および構成するには管理者レベルのロールが必要です。組織ロールは、テナント内の権限を定義するものです。組織の所有者は管理者レベルの権限を持ち、組織のメンバーはユーザー レベルの権限を持ちます。組織の所有者は、他のユーザーを追加および管理できます。

組織ロール	サービス ロール
■ 組織の所有者 ■ 組織のメンバー	■ Cloud Assembly 管理者 ■ Cloud Assembly ユーザー ■ Service Broker 管理者 ■ Service Broker ユーザー ■ Code Stream 管理者 ■ Code Stream ユーザー ■ Code Stream ビューア

表に示したロールに加えて、さらにプロジェクト管理者、プロジェクト ユーザーという 2 つの主なプロジェクト レベルのロールがあります。これらのロールは、Cloud Assembly でプロジェクトごとに個別に割り当てられます。これらはやや流動的なロールです。あるプロジェクトの管理者を別のプロジェクトのユーザーにすることもできます。

LCM と Workspace ONE Access の使用方法の詳細については、VMware Identity Manager を使用したユーザー管理を参照してください。

この章には、次のトピックが含まれています。

- vRealize Automation で Active Directory グループをプロジェクトに対して有効にする方法
- vRealize Automation でユーザーを削除する方法
- vRealize Automation でユーザー ロールを編集する方法
- vRealize Automation でグループ ロールの割り当てを編集する方法

vRealize Automation で Active Directory グループをプロジェクトに対して有効にする方法

ユーザーをプロジェクトに追加するときに [グループの追加] ページにグループがない場合には、[ID およびアクセス権の管理] ページを確認して、グループがあればそれを追加します。グループが vRealize Automation の [ID およびアクセス権の管理] 画面に表示されない場合、そのグループは Workspace ONE Access インスタンスで同期されていない可能性があります。同期されていることを確認してから、この手順を使用して、次に示すようにグループを追加します。

Active Directory グループのメンバーをプロジェクトに追加するには、そのグループが Workspace ONE Access インスタンスと同期され、組織に追加されていることを確認する必要があります。

前提条件

同期されていないグループはプロジェクトに追加できません。Active Directory グループが Lifecycle Manager インスタンスと同期していることを確認します。

手順

1. 追加する同じ Active Directory ドメインから、ユーザーとして vRealize Automation にログインします。例：@mycompany.com
2. Cloud Assembly で、ヘッダーの右ナビゲーションにある [ID およびアクセス権の管理] をクリックします。
3. [エンタープライズグループ] をクリックし、[ロールの割り当て] をクリックします。
4. 追加するグループを検索機能によって検索し、選択します。
5. 組織ロールを割り当てます。

   グループには、少なくとも組織メンバーのロールが必要です。詳細については、vRealize Automation Cloud Assembly のユーザー ロールについてを参照してください。
6. [サービスへのアクセス権の追加] をクリックし、1 つ以上のサービスを追加して、それぞれについてロールを選択します。

7 [割り当て] をクリックします。

結果

これで、Active Directory グループをプロジェクトに追加できるようになりました。

vRealize Automation でユーザーを削除する方法

vRealize Automation では、ユーザーを必要に応じて削除できます。

デフォルトではすべてのユーザーが表示されます。[ID およびアクセス権の管理] 画面では、ユーザーを追加することはできません。ユーザーを削除することはできます。

手順

1 [ID およびアクセス権の管理] 画面で [アクティブなユーザー] タブを選択します。

2 削除するユーザーを選択します。

3 [ユーザーの削除] をクリックします。

結果

選択したユーザーが削除されます。

vRealize Automation でユーザー ロールを編集する方法

vRealize Automation にインポート済みの Workspace ONE Access ユーザーに割り当てるロールを編集できます。

前提条件

手順

1 Cloud Assembly で、ヘッダーの右ナビゲーションにある [ID およびアクセス権の管理] をクリックします。

2 [アクティブなユーザー] タブで目的のユーザーを選択し、[ロールの編集] をクリックします。

3 ユーザーの組織およびサービス ロールを編集できます。

- [組織ロールの割り当て] という見出しの横にあるドロップダウンを選択して、ユーザーと組織の関係を変更します。
- ユーザーに新しいサービス ロールを追加するには、[サービスへのアクセス権の追加] をクリックします。
- ユーザー ロールを削除するには、該当するサービスの横にある [X] をクリックします。

4 [保存] をクリックします。

結果

指定したとおりにユーザー ロールの割り当てが更新されます。

vRealize Automation でグループ ロールの割り当てを編集する方法

vRealize Automation でグループへのロールの割り当てを編集できます。

前提条件

vRealize Automation の展開に関連付けられている有効な vIDM インスタンスからユーザーとグループがインポートされていること。

手順

1 Cloud Assembly で、ヘッダーの右ナビゲーションにある [ID およびアクセス権の管理] をクリックします。

2 [エンタープライズ グループ] タブを選択します。

3 検索フィールドに、ロールの割り当てを編集するグループの名前を入力します。

4 選択されたグループのロールの割り当てを編集します。これには、次の 2 つの方法があります。

- 組織ロールの割り当て
- サービス ロールの割り当て

5 [割り当て] をクリックします。

結果

指定したとおりにロールの割り当てが更新されます。

vRealize Automation アプライアンスの保守

3

システム管理者として、インストールされている vRealize Automation アプリケーションが正常に機能するように、さまざまなタスクを実行する必要がある場合があります。

vRealize Automation を初めて使用する場合は、これらのタスクは必須ではありません。これらのタスクの実行方法を把握することは、パフォーマンスや製品の動作に関する問題を解決する必要がある場合に役立ちます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- vRealize Automation の起動と停止
- vRealize Automation の時刻同期を有効にする方法
- 時刻同期を無効にする方法
- vRealize Automation の root パスワードをリセットする方法

vRealize Automation の起動と停止

vRealize Automation の起動またはシャットダウン時の適切な手順は次のとおりです。

vRealize Automation のシャットダウン

データの整合性を維持するために、仮想アプライアンスをパワーオフする前に vRealize Automation サービスをシャットダウンする必要があります。

注： 可能であれば、`vracli reset vidm` コマンドは使用しないでください。このコマンドは、Workspace One Access のすべての設定をリセットし、ユーザーとプロビジョニング済みリソースとの間の関連付けを解除します。

1 SSH または VMRC を使用して、任意の vRealize Automation アプライアンスのコンソールにログインします。

2 すべてのクラスタ ノードで vRealize Automation サービスをシャットダウンするには、次の一連のコマンドを実行します。

注： これらのコマンドのいずれかをコピーして実行すると失敗する場合は、まずメモ帳に貼り付け、そこからコピーし直して実行します。この手順により、ドキュメント ソースに存在する可能性のある非表示の文字やその他のアーティファクトを取り除きます。

```
/opt/scripts/svc-stop.sh
sleep 120
/opt/scripts/deploy.sh --onlyClean
```

3 vRealize Automation アプライアンスをシャットダウンします。

これで、vRealize Automation 環境がシャットダウンされます。

vRealize Automation の起動

予定外のシャットダウン、制御されたシャットダウン、またはリカバリ手順の後は、特定の順序で vRealize Automation コンポーネントを再起動する必要があります。vRLCM は重要度の低いコンポーネントであるため、いつでも起動できます。以前は VMware Identity Management と呼ばれていた VMware Workspace ONE Access コンポーネントは、vRealize Automation を起動する前に起動する必要があります。

注： vRealize Automation コンポーネントを起動する前に、対応するロードバランサが実行されていることを確認します。

1 すべての vRealize Automation アプライアンスをパワーオンし、起動するまで待機します。

2 SSH または VMRC を使用して任意のアプライアンスのコンソールにログインし、次のコマンドを実行して、すべてのノードのサービスを復旧します。

```
/opt/scripts/deploy.sh
```

3 次のコマンドにより、すべてのサービスが実行されていることを確認します。

```
kubectl get pods --all-namespaces
```

注： 各サービスについて、それぞれ実行中または完了済みのいずれかの状態で 3 つのインスタンスが表示されます。

すべてのサービスが実行中または完了済みと表示されたら、vRealize Automation を使用する準備が完了しています。

vRealize Automation の再起動

すべての vRealize Automation サービスは、クラスタ内の任意のアプライアンスから一元的に再起動できます。上記の手順で vRealize Automation をシャットダウンし、指示どおりに vRealize Automation を起動します。vRealize Automation を再起動する前に、該当するすべてのロードバランサと VMware Workspace ONE Access コンポーネントが実行されていることを確認します。

すべてのサービスが実行中または完了済みと表示されたら、vRealize Automation を使用する準備が完了しています。

次のコマンドを実行して、すべてのサービスが実行されていることを確認します。

```
kubectl –n prelude get pods
```

vRealize Automation の時刻同期を有効にする方法

vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインを使用して、vRealize Automation 環境で時刻同期を有効にすることができます。

NTP (Network Time Protocol) ネットワーク プロトコルを使用して、スタンドアローンまたはクラスタ化された vRealize Automation 環境に対して時刻同期を構成できます。vRealize Automation は、相互に排他的な 2 つの NTP 構成をサポートしています。

NTP 構成	説明
ESXi	この構成は、vRealize Automation アプライアンスをホストしている ESXi サーバが NTP サーバと同期されている場合に使用できます。クラスタ化された環境を使用している場合は、すべての ESXi ホストを NTP サーバと同期する必要があります。 **注：** NTP サーバと同期されていない ESXi ホストに vRealize Automation 環境を移行すると、時刻のずれが生じる場合があります。 ESXi 向けに NTP を構成する方法については、ナレッジベースの記事 KB57147Configuring Network Time Protocol (NTP) on an ESXi host using the vSphere Web Client を参照してください。
systemd	この構成では systemd-timesyncd デーモンを使用して vRealize Automation 環境の時刻を同期します。 **注：** デフォルトでは、systemd-timesyncd デーモンは有効になっていますが、NTP サーバなしで構成されています。動的 IP アドレス構成が使用されている vRealize Automation アプライアンスでは、DHCP プロトコルが受信する任意の NTP サーバを使用できます。

手順

1 vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインに root としてログインします。

2 ESXi で NTP モードを有効にします。

   a `vracli ntp esxi ––enable` コマンドを実行します。

   b `vracli ntp apply` コマンドを実行します。

   ESXi の NTP 構成が vRealize Automation 環境に適用されます。

3 systemd で NTP モードを有効にします。

a `vracli ntp systemd --set` *`FQDN_or_IP_of_systemd_server`* コマンドを実行します。

> **注：** 複数の systemd NTP サーバを追加するには、ネットワーク アドレスをカンマで区切ります。

b `vracli ntp apply` コマンドを実行します。

systemd の NTP 構成が vRealize Automation 環境に適用されます。

4 （オプション） NTP 構成のステータスを確認するには、`vracli ntp status` コマンドを実行します。

NTP サーバと vRealize Automation 環境の間に 10 分を超える時間差があると、NTP 構成は失敗する可能性があります。この問題を解決するには、NTP サーバと同期されている vRealize Automation アプライアンスを再起動します。

時刻同期を無効にする方法

vRealize Automation 環境で NTP (Network Time Protocol) 時刻同期を無効にするには、vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインを使用します。

前提条件

ESXi または systemd との時刻同期が構成されていることを確認します。vRealize Automation の時刻同期を有効にする方法を参照してください。

手順

1 vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインに root としてログインします。

2 ESXi NTP 構成を無効にします。

a `vracli ntp esxi --disable` コマンドを実行します。

b `vracli ntp apply` コマンドを実行します。

ESXi NTP 構成が無効になります。

3 systemd NTP 構成を無効にします。

a `vracli ntp systemd --disable` *`FQDN_or_IP_of_systemd_server`* コマンドを実行します。

b `vracli ntp apply` コマンドを実行します。

systemd NTP 構成が無効になります。

4 （オプション） NTP 構成のステータスを確認するには、`vracli ntp status` コマンドを実行します。

vRealize Automation の root パスワードをリセットする方法

vRealize Automation root パスワードを紛失したり、忘れたりした場合は、パスワードをリセットできます。

この手順では、ホスト vCenter アプライアンスのコマンド ライン ウィンドウを使用して、組織の vRealize Automation root パスワードをリセットします。

前提条件

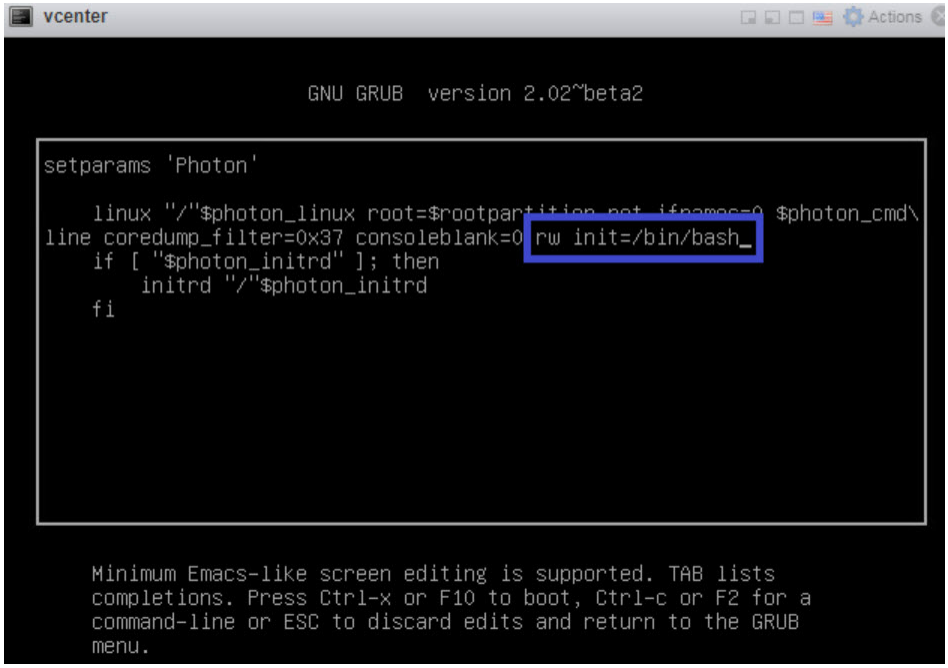
このプロセスは、vRealize Automation 管理者を対象としています。また、このプロセスでは、ホスト vCenter アプライアンスにアクセスする際に必要な認証情報を入力する必要があります。

手順

1 vRealize Automation の起動と停止で説明されている手順を使用して、vRealize Automation をシャットダウンして起動します。

2 Photon オペレーティング システムのコマンド ライン ウィンドウが表示されたら、e と入力して [Enter] キーを押し、GNU GRUB ブート メニュー エディタを開きます。

3 GNU GRUB エディタで、次のように `linux "/" $photon_linux root=rootpartition` で始まる行の最後に `rw init=/bin/bash` と入力します。



4 [F10] キーをクリックして変更をプッシュし、vRealize Automation を再起動します。

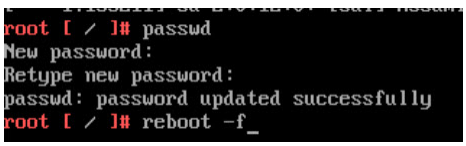
5 vRealize Automation が再起動するまで待機します。

6 `root [/]#` プロンプトで `passwd` と入力し、[Enter] キーを押します。

7 `New password:` プロンプトで新しいパスワードを入力し、[Enter] キーを押します。

8 `Retype new password:` プロンプトが表示されたら、新しいパスワードを再入力して、[Enter] キーを押します。

9 `root [/]#` プロンプトで、`reboot –f` と入力して [Enter] キーを押し、root パスワードのリセット プロセスを完了します。



次のステップ

vRealize Automation 管理者として、新しい root パスワードを使用して vRealize Automation にログインできます。

vRealize Automation でのログの操作

4

提供されている vracli コマンドライン ユーティリティを使用して、vRealize Automation でログを作成および使用できます。

vRealize Automation で直接ログを使用することも、すべてのログを vRealize Log Insight に転送することもできます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- vRealize Automation でログおよびログ バンドルを操作する方法
- vRealize Log Insight へのログ転送を設定する方法

vRealize Automation でログおよびログ バンドルを操作する方法

vRealize Automation で vRealize Automation ログとログ バンドルを作成して使用できます。

または、ログを vRealize Log Insight に自動的に転送することもできます。ログを vRealize Log Insight に転送する方法については、vRealize Log Insight へのログ転送を設定する方法を参照してください。

vracli コマンドライン ユーティリティの使用方法については、vracli コマンドラインの--help 引数を使用して確認できます。例：vracli log-bundle --help

ログ バンドル コマンド

単純なログ バンドル、またはすべてのサービスの集約された（コールド ストレージ）ログを作成できます。どちらのログ バンドルにもサービスのすべてのログが含まれますが、コールド ストレージ バンドルにはサービス ログの過去バージョンの集約ストリームのコピーが含まれ、トラブルシューティングに利用できます。コールド ストレージ エージェントは、サービスのログを継続的に集約してローカルのファイル システムに保存します。通常、トラブルシューティングに必要なものは単純なログ バンドルだけです。

各ノードからログを収集するときのデフォルトのタイムアウト値を変更することもできます。

クラスタ化された環境では、1 つのノードで vracli log-bundle コマンドを実行するだけで十分です。

- ログ バンドル コマンドのヘルプの表示

  ```
  vracli log-bundle --help
  ```

- 単純なログ バンドルの作成

  ```
  vracli log-bundle
  ```

- コールド ストレージ ログ バンドルの作成

  `vracli log-bundle --include-cold-storage`

- 各ノードからログを収集するときのタイムアウト値の変更。たとえば、環境に大きなログ ファイルが含まれている、ネットワークが遅い、CPU 使用率が高いなどの場合は、タイムアウトをデフォルト値の 1,000 秒よりも大きく設定する必要がある可能性があります。

  `vracli log-bundle --collector-timeout $`*`CUSTOM_TIMEOUT_IN_SECONDS`*

ログ バンドルの構造

vRealize Automation サービスは Kubernetes ポッド内にコンテナ化されています。生成されたログ バンドルは、`log-bundle-{{`*`TIMESTAMP`*`}}.tar.xz` 名前形式を使用する `tar.xz` アーカイブです。TIMESTAMP は、秒単位のエポック タイムスタンプです。通常のログ バンドルには、環境内のすべてのノードのログが含まれています。何らかの理由でログ バンドルを生成できない場合は、代わりにフォールバック バンドルが作成されます。フォールバック バンドルには、現在のノードのログのみが含まれています。2 つのログ バンドル タイプの構造には若干の違いがあります。

- 通常のログ バンドル

  通常のログ バンドルは、次のカテゴリに分類されます。

  - ホスト ログと設定

    各ホストとそのホスト固有のログの設定は、クラスタ ノード（ホスト）ごとに 1 つのディレクトリに収集されます。ディレクトリ名はノードのホスト名と一致します。ディレクトリの内容はホストのファイル システムと一致します。ディレクトリの数はクラスタ ノードの数と一致します。

    コールド ストレージ ログは、構造化された JSON ログに `/`*`hostname`*`/services-logs/all/aggregated.log` として格納されます。

  - ポッド ログ

    サービスは Kubernetes ポッド内にコンテナ化されています。サービス ログは `pods` ディレクトリに置かれます。このディレクトリには、名前空間ごとに 1 つ、名前空間名と同じファイル名を持つディレクトリがあります。通常、クラスタ ノードごとに各ポッドの 1 つのインスタンスが存在します。ポッド ディレクトリには、各コンテナ アプリケーションのログ ファイルがあります。

    たとえば、vRealize Orchestrator コントロール センターのログは、各 `/pods/prelude/vco-app-hash/` ディレクトリの `vco-controlcenter-app.log` ファイルに格納されます。

  - 環境ファイル

    環境ファイルには、現在のリソース使用量の情報がノード別およびポッド別に含まれています。また、使用可能なすべての Kubernetes エンティティのクラスタ情報と説明も含まれています。

- フォールバック ログ バンドル

  `vracli` コマンドの終了を待機しているときにエラー メッセージが通知されると、フォールバック バンドルが生成されます。このエラーが通知された場合は、クラスタ内の各ホストまたはノードで `vracli log-bundle` コマンドを実行して、できるだけ多くの情報を収集する必要があります。

  - フォールバック コンテナ ログ

フォールバック ログは、/fallback-containers ディレクトリにあります。ログ ファイル名を調べることにより、ポッドがどのコンテナでログを生成したかを識別できます。

pod-name-some-hash-container-name-other-hash.log

- フォールバック コールド ストレージ

  バンドルを使用してコールド ストレージ ログを収集している場合は、現在のホストのフォールバック ログが /fallback-cold-storage ディレクトリにあります。

vRealize Log Insight へのログ転送を設定する方法

ログを vRealize Automation から vRealize Log Insight に転送して、より確かなログ分析とレポート生成を利用できます。

vRealize Automation は、fluentd ベースのログ エージェントにバンドルされています。このエージェントはログを収集して保存することで、ログをログ バンドルに含めて後で検証できるようにします。vRealize Log Insight API を使用してログのコピーを vRealize Log Insight サーバに転送するように、エージェントを設定できます。提供されている API により、他のプログラムが vRealize Log Insight と通信できます。

vRealize Log Insight の詳細、および vRealize Log Insight API のドキュメントについては、vRealize Log Insight のドキュメント、および/api/v1/events/ingest/{agentId}ページを参照してください。

提供されている vracli コマンドライン ユーティリティを使用して、vRealize Automation ログを自動的かつ継続的に vRealize Log Insight に転送するようにログ エージェントを構成します。

vracli コマンドライン ユーティリティの使用方法については、vracli コマンドラインの --help 引数を使用して確認できます。例：vracli vrli --help

vRealize Log Insight の既存の構成の確認

Command

vracli vrli

Arguments

コマンドライン引数はありません。

Output

vRealize Log Insight 統合の現在の設定が JSON 形式で出力されます。

Exit codes

終了コードは次のとおりです。

- 0：vRealize Log Insight との統合が設定されています。
- 1：コマンドの実行中に例外が発生しました。詳細については、エラー メッセージを確認してください。
- 61 (ENODATA) -vRealize Log Insight との統合は設定されていません。詳細については、エラー メッセージを確認してください。

Example – check integration configuration

```
$ vracli vrli
No vRLI integration configured

$ vracli vrli
{
    "agentId": "0",
    "environment": "prod",
    "host": "my-vrli.local",
    "port": 443,
    "scheme": "https",
    "sslVerify": false
}
```

注： 次の例に示すように、ログの送信に使用するホスト スキーム（デフォルトは https）とポート（デフォルトは 443）には、別の値を設定できます。

```
vracli vrli set some-host
vracli vrli set some-host:9543
vracli vrli set http://some-host:9543
```

vRealize Log Insight の取り込み API では、ポート 9543 が使用されます。詳細については、vRealize Log Insight のドキュメントの「vRealize Log Insight の管理」トピックと「ポートおよび外部インターフェイス」を参照してください。

vRealize Log Insight の統合の設定または更新

Command

```
vracli vrli set [options] FQDN_OR_URL
```

Arguments

次のコマンドライン引数を使用できます。

- FQDN_OR_URL - vRealize Log Insight API 設定を使用してログを送信するときに使用する vRealize Log Insight サーバの FQDN または IP アドレス。デフォルトでは、ポート 443 と HTTPS スキームが使用されます。これらの設定のいずれかを変更する必要がある場合は、代わりに URL を使用できます。
- オプション
  - `--agent-id SOME_ID` - このアプライアンスのログ エージェントの ID を設定します。デフォルト値は `0` です。vRealize Log Insight API 設定を使用して vRealize Log Insight に送信されたログのログ エージェントを識別するために使用します。
  - `--environment ENV` - 現在の環境の識別子を設定します。vRealize Log Insight ログで、ログ行の各イベントのタグとして使用できるようになります。デフォルト値は `prod` です。

- `--ca-file /path/to/server-ca.crt` -vRealize Log Insight サーバ証明書の署名に使用された認証局 (CA) 証明書を含むファイルを指定します。指定された CA が vRealize Log Insight サーバの証明書を検証できるように、ログ エージェントが CA を信頼するように設定します。証明書を検証するために必要な場合は、ファイルに証明書チェーン全体を含めることができます。自己署名証明書の場合は、証明書自体を渡します。
- `--ca-cert CA_CERT` - `--ca` ファイルと同じようにファイルを指定しますが、証明書（チェーン）を文字列としてインラインで渡します。
- `--insecure` - サーバ証明書の SSL 検証を無効にします。ログの送信時に、ログ エージェントがすべての SSL 証明書を受け入れるように設定します。

`Output`

出力はありません。

`Exit codes`

終了コードは次のとおりです。

- 0 - 設定が更新されました。
- 1 - 実行中に例外が発生しました。詳細については、エラー メッセージを確認してください。

`Examples – Configure or update integration configuration`

```
$ vracli vrli set my-vrli.local
$ vracli vrli set 10.20.30.40

$ vracli vrli set --ca-file /etc/ssl/certs/ca.crt 10.20.30.40

$ vracli vrli set --ca-cert "$(cat /etc/ssl/certs/ca.crt)" 10.20.30.40

$ vracli vrli set --insecure http://my-vrli.local:8080

$ vracli vrli set --agent-id my-vrli-agent my-vrli.local

$ vracli vrli set --environment staging my-vrli.local
```

vRealize Log Insight の統合のクリア

`Command`

`vracli vrli unset`

`Arguments`

コマンドライン引数はありません。

`Output`

確認はプレーン テキスト形式で出力されます。

`Exit codes`

終了コードは次のとおりです。

- 0 - 設定がクリアされたか、設定がありませんでした。
- 1 - 実行中に例外が発生しました。詳細については、エラー メッセージを確認してください。

Examples – Clear integration

```
$ vracli vrli unset
Clearing vRLI integration configuration

$ vracli vrli unset
No vRLI integration configured
```

vRealize Automation のカスタマー エクスペリエンス向上プログラムへの参加

5

この製品は、VMware のカスタマー エクスペリエンス向上プログラム (CEIP) に参加しています。CEIP で収集される情報は、VMware 製品およびサービスの向上、問題の解決、各製品のデプロイおよび使用に関する最適な方法をお客様に提案するために役立てられます。

CEIP を通じて収集されるデータに関する詳細と、VMware によるそのデータの使用目的については、http://www.vmware.com/trustvmware/ceip.html の Trust & Assurance Center に記載されています。

この章には、次のトピックが含まれています。

- vRealize Automation のカスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加または離脱する方法
- vRealize Automation でカスタマー エクスペリエンス向上プログラムのデータ収集時間を設定する方法

vRealize Automation のカスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加または離脱する方法

カスタマー エクスペリエンス向上プログラム (CEIP) への参加または離脱は、vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインから実行できます。

CEIP プログラムには、vRealize Automation のインストール時に、vRealize Lifecycle Manager (LCM) を使用して参加できます。インストール後に、コマンド ライン オプションを使用してプログラムに参加または離脱することも可能です。

コマンドライン オプションを使用してカスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加するには、次の手順を実行します。

1 vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインに root としてログインします。

2 `vracli ceip on` コマンドを実行します。

3 カスタマー エクスペリエンス向上プログラムの情報を確認し、`vracli ceip on --acknowledge-ceip` コマンドを実行します。

4 vRealize Automation サービスを再起動するには、`/opt/scripts/deploy.sh` コマンドを実行します。

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムから離脱するには、次のようにコマンド ライン オプションを使用します。

1 vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインに root としてログインします。

2 `vracli ceip off` コマンドを実行します。

3 vRealize Automation サービスを再起動するには、`/opt/scripts/deploy.sh` コマンドを実行します。

vRealize Automation でカスタマー エクスペリエンス向上プログラムのデータ収集時間を設定する方法

カスタマー エクスペリエンス向上プログラム (CEIP) から VMware にデータを送信する日時を設定できます。

手順

1 vRealize Automation アプライアンスのコマンド ラインに root としてログインします。

2 テキスト エディタで次のファイルを開きます。

`/etc/telemetry/telemetry-collector-vami.properties`

3 曜日と時刻のプロパティを編集します。

プロパティ	説明
`frequency.dow=<day-of-week>`	データの収集が開始される曜日。
`frequency.hod=<hour-of-day>`	データの収集が開始される時刻（現地時間）。0～23 の値を指定できます。

4 `telemetry-collector-vami.properties` を保存して閉じます。

5 次のコマンドを入力して設定を適用します。

`vcac-config telemetry-config-update --update-info`

環境内のすべてのノードに変更が適用されます。